

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第142集

赤畑遺跡発掘調査報告書

県道宮古・岩泉線道路改良関連遺跡発掘調査

(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

赤畑遺跡発掘調査報告書

県道宮古・岩泉線道路改良関連遺跡発掘調査

序

本県には縄文時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財包蔵地があり、7,300箇所に及ぶ遺跡が確認されております。これら先人の残した貴重な文化遺産を保護し、後世に伝えていくことは、県民に課せられた責務であります。

一方、広大な面積を有する本県の大部分は山地であり、地域社会の発展に欠かすことのできない交通網の整備も重要な一施策であります。宮古市山口地区における県道宮古岩泉線の改良事業は、重要路線の円滑な交通を確保するものとして期待されております。

このような埋蔵文化財の保護と開発との調和ある施策も今日的課題であり、当岩手県文化振興事業団では埋蔵文化財センターの創設以来岩手県教育委員会の指導と調整のもとに開発事業によって消滅する遺跡の発掘調査を行い、記録保存する措置をとってまいりました。

県道宮古岩泉線改良事業に関連する赤畑遺跡は、宮古市街地西方の山口川右岸に位置し、昭和62・63年の発掘調査によって縄文・弥生時代の遺物と中世の遺構等が発見され、沿岸部における貴重な資料を提供することができました。

本報告書が広く活用され、斯学の研究のみならず埋蔵文化財に対する理解の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、これまでの発掘調査及び報告書作成に御協力、御援助を賜りました宮古土木事務所、宮古市教育委員会をはじめとする関係各位に衷心より謝意を表します。

平成元年5月

財団法人岩手県文化振興事業団
理事長 中村 直

例 言

1. 本報告書は、岩手県宮古市大字山口第 11 地割字赤畑 8 ほかにある赤畑遺跡の調査結果を収録したものである。本遺跡の岩手県遺跡台帳番号は LE 23-2215 である。
2. 本遺跡の調査は、一般県道宮古・岩泉線道路改良工事に伴う緊急発掘調査であり、岩手県土木部と岩手県教育委員会文化課との協議を経て、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。
3. 野外調査期間と調査面積・調査担当者は、次のとおりである。

第 1 次	昭和 62 年 9 月 1 日～10 月 9 日	1,200 m ²	中村良一
第 2 次	昭和 63 年 7 月 1 日～7 月 30 日	1,050 m ²	玉川英喜・光井文行
4. 整理期間と整理担当者は、次のとおりである。

第 1 次	昭和 62 年 11 月 1 日～11 月 30 日	中村良一
第 2 次	昭和 63 年 11 月 1 日～11 月 30 日	玉川英喜
5. 野外調査および室内整理において、以下の機関や方々の御協力、御教示を賜った。(敬称略)

岩手県宮古土木事務所	宮古市教育委員会
武田将男、高橋憲太郎、鎌田祐二、盛合義信(宮古市)	
6. 分析・鑑定は次の方々に依頼した。(敬称略)

鉄器・鉄滓	赤沼英男(岩手県立博物館)
石質鑑定	佐藤二郎(佐藤地質工学研究所)
炭化材樹種鑑定	早坂松二郎(岩手県木炭協会)
7. 野外調査の作業には北村昭一氏をはじめ地元宮古市の方々から御協力をいただいた。
8. 発掘調査の諸記録と遺物は、遺跡調査略号 AH-87・AH-88 を付して岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。

本文目次

序 例言

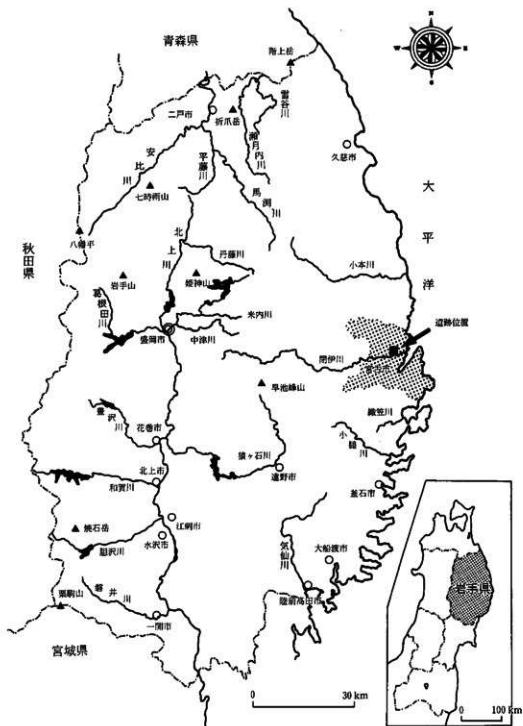
I 調査に至る経過	1	III 調査の方法	11
II 立地と環境	2	IV 検出された遺構と遺物	15
1 位置と地形	2	1 遺構と遺構内の出土遺物	15
2 遺跡付近の地形	2	2 遺構外の出土遺物	25
3 基本層序	7	V まとめ	32
4 周辺の遺跡	8	付篇 分析・鑑定結果	34

図版目次

第1図 道路改良路線と赤畑遺跡	1	第10図 ビット	19
第2図 遺跡位置図	3	第11図 焼土	20
第3図 地形分類図	4	第12図 溝跡	21
第4図 調査区周辺の地形図 ・グリッド配置図	5	第13図 柱穴群	23
第5図 土層柱状図	7	第14図 遺構外の出土遺物 土器(1)	28
第6図 周辺の遺跡位置図	9	第15図 遺構外の出土遺物 土器(2)	29
第7図 遺構配置図	13	第16図 遺構外の出土遺物 土器(3)・土製品 石器(1)・石製品	30
第8図 1号住居址	16	第17図 遺構外の出土遺物 石器(2)	31
第9図 2号住居址	17		

写真図版目次

PL-1 遺跡近景	39	PL-7 遺構内の出土遺物 遺構外の出土遺物 土器(1)	45
PL-2 1号・2号住居址	40	PL-8 遺構外の出土遺物 土器(2)	46
PL-3 2号住居址	41	PL-9 // 土器(3)	47
PL-4 ビット	42	PL-10 // 土器(4)	48
PL-5 焼土・溝跡	43	PL-11 // 土器(5)・土製品 石器・石製品	49
PL-6 柱穴群・基本層序	44		



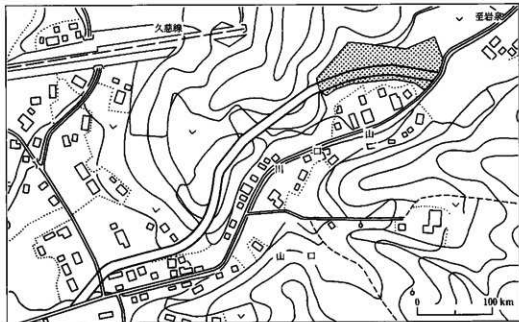
岩手県全図

I 調査に至る経過

宮古市山口地区における一般県道宮古岩泉線は、新興団地から宮古市中心部に通じる重要路線であるが、線形不良と幅員狭小であることから通行の支障をきたしており、円滑な交通を確保するため昭和62年から改良事業が着手された。宮古市山口1丁目2-9から同大字山口第11地割字赤畑13-1までの住宅地を迂回する総延長615m、幅員8mの道路改良であり、平成元年に完成の予定である。

これにかかわる周知の遺跡である赤畑遺跡の取扱いについては、岩手県土木部、宮古土木事務所と岩手県教育委員会との間で協議がなされた。昭和61年8月20日付け「教文第291号」により、昭和62年度における埋蔵文化財に関連する土木事業等についての調査を経て、昭和61年11月7・8日に県教育委員会文化課による現地確認調査が実施された。その結果、遺跡にかかる用地内の全面調査を必要とすることが明らかとなり、工事計画に沿って発掘調査を実施することとしてさらに両者で協議を重ね、県教育委員会文化課は昭和62年度における岩手県文化振興事業団の受託事業にすることとした。

これにより、当埋蔵文化財センターは昭和62年9月1日付け契約により発掘調査に着手することとなったが、用地買収未了区域については継続調査することとし、昭和63年6月20日付け委託契約により実施したものである。



第1図 道路改良路線と赤畑遺跡

II 立地と環境

1. 位置と地形

赤畑遺跡は岩手県宮古市山口第11地割字赤畑8の3ほかに所在し、東日本旅客鉄道山田線宮古駅の北西約2 kmに位置する。宮古駅からは県道宮古・岩泉線を北上して山口地区センターに至り、ここからさらに北北西に500 m程進んだ地点である。

宮古市は岩手県沿岸部のほぼ中央に位置し、北側に田老町・岩泉町、西側に新里村、南側に山田町が隣接する。東側には太平洋を望み、西側に早池峰山(1,914 m)を最高峰とする北上山地の山々が連なる。宮古市の海岸は景勝地として名高い三陸海岸の一部である。三陸海岸は宮古市付近を境に、その南部と北部とでは様相を異にする。南部は湾と岬が入り組んだ屈曲の多いリアス式海岸である。それに対し、北部は南部に比べれば出入りの少ない比較的単調な海岸線である。所々に、海食によってできた高さ100 mを越す海食崖のつづく豪壮な海岸地形が見られる。北部と南部の地形形成の要因は「もともとの地形の違い、岩質の差、隆起速度の違い」(1985年貝塚他)等が考えられている。三陸海岸は山地が海岸まで迫る地形のため、低地は河川の流域の狭い範囲に限られる。宮古付近の比較的まとまった低地は閉伊川とその支流である長沢川、近内川の流域及び八木沢川流域である。

丘陵地は低地の周辺や海岸に沿って見られる。閉伊川の北側では板屋付近から東に山地と低地に挟まれるように帯状に延び、南側では長沢川との合流付近や磯島の西側の低地と山地の間に分布する。海岸沿いでは山地に挟まれて南北に帯状に延びる。

山地は丘陵地の背後に広がる。図幅内(第3図)の山地は起伏量の比較的小さい小起伏ないし中起伏山地である。赤畑遺跡の北側の山地は、宮古市北西端に位置する峠ノ神山(1,230 m)、亀ヶ森(1,112 m)から南東方向に延びる山麓地の縁辺である。

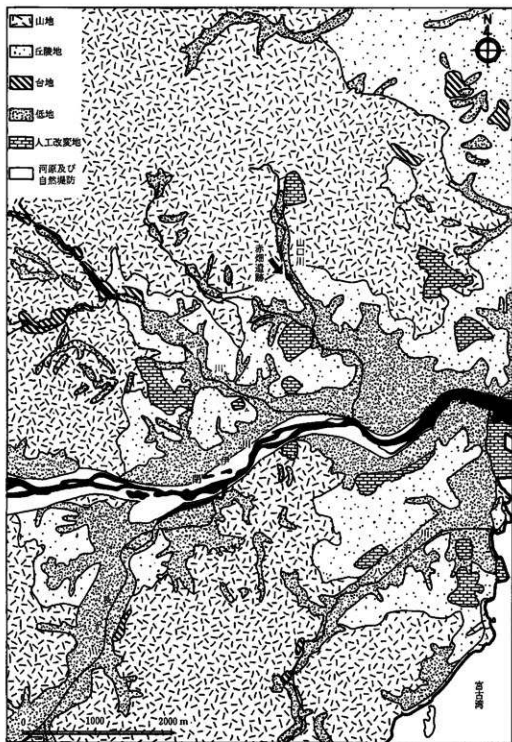
現在の宮古市の市街地は閉伊川とその支流の低地及び八木沢川河口付近の低地に広がり、中心街は閉伊川の河口付近で山口川と合流する氾濫低地に形成されている。街並みはさらに低地周辺の丘陵地や山地に延びる傾向を見せており、周辺の丘陵地・山地にはニュータウンとして造成された人工改変地が目につく。

2. 遺跡付近の地形

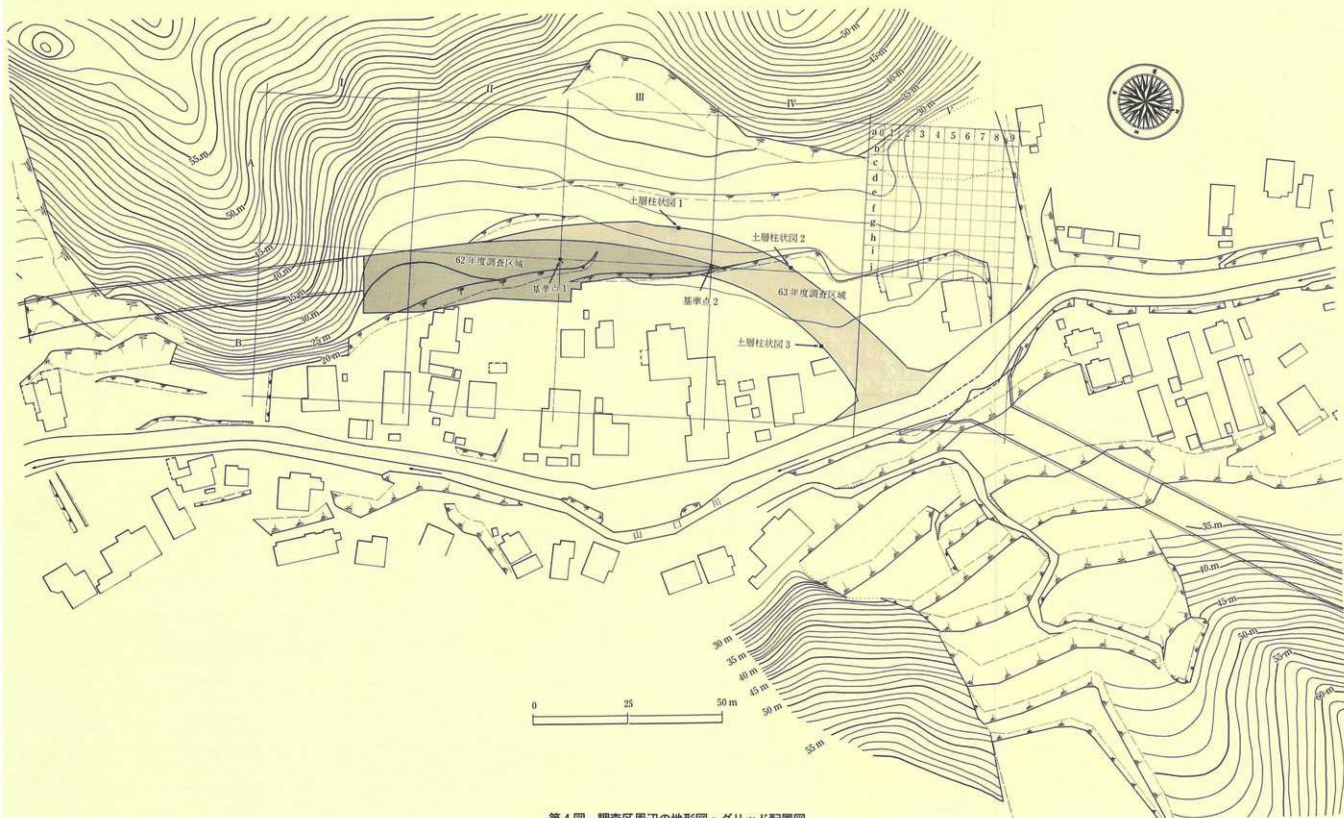
遺跡は閉伊川支流の山口川右岸の丘陵地から谷底平野に至る緩斜面および平坦地に立地する。山口川は遺跡から数 km 北側に源を発する小規模河川で、兩岸に狭い谷底平野を形成する。



第2圖 遺跡位置圖



第3図 地形分類図



第4図 調査区周辺の地形図・グリッド配置図

遺跡の東側を南流し、2 km 程下った所で閉伊川と合流する。遺跡は東側を山口川とそれに併行する県道宮古・岩泉線に、西側を小高い標高 60 m 前後の丘陵に限られる。西側の丘陵の尾根筋は概ね南東—北西方向に延び、多少の出入りがあるため、遺跡の北側と南側もこの丘陵の張り出しに視界を遮られる。

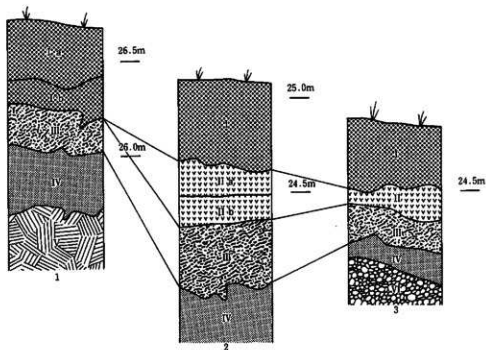
遺跡内の地形は微視的に見ると2つに分かれる。2つの基準点を結んだ軸線(III章に後述)付近に1.5 m 前後の段差があり、その西側は丘陵地から続く緩斜面(以後H面)、東側は標高を一段下げ山口川河岸まで平坦面ないしは高低差1 m 程度の緩斜面(以後L面)となっている。

調査区内の現況は畑地および草地である。標高は24~26.5 m 前後で、山口川の河床とは約5~8 m の比高がある。

3. 基本層序

土層柱状図(第5図)の1~3はそれぞれグリッドIII A 7 h 付近・IV A 5 j 付近・IV B 7 e 付近で作成した。1は西側のH面のものであり、2・3は東側のL面のものである。

I層 黒褐色~暗褐色土(10 YR 2/2~3/4) シルト質土で明黄褐色の粒子や小礫が混じる。2層に細分され、上層のa層は現在の耕作土で締りが弱い。下層のb層は上層より細砂や小礫の混入が多く、色調は暗色。遺跡全面を覆い、層厚は上・下両層合わせて40~80 cm である。



第5図 土層柱状図

- II層 黒褐色～暗褐色土 (10 YR 2/3～3/4) 2層に分けられ、上層のa層は小礫混じりの粗砂層、下層のb層は細砂層である。H面には段差付近以外には堆積が見られず、L面に堆積する。L面でも調査区北東部ではこの層を欠く。縄文土器片等の遺物が含まれる。
- III層 黒色土 (10 YR 1.7/1～2/1) シルト質土で明黄褐色の粒子が若干含まれる。遺跡のほぼ全面に堆積し、層厚は10～40cm。下部に縄文土器片が若干含まれる。
- IV層 黒褐色～褐色土 (10 YR 3/2～4/6) シルト質土で上部が暗色、下部は明色となる傾向がある。H面・L面とも明黄褐色の粒子が含まれているのでIV層として図示したが、様相には幾分相違がある。H面では色調に幅があり、上部が黒褐色、下部は褐色で、V層土の漸移層の様相を示す。L面ではH面ほど色調に差がなく、ほぼ暗褐色を呈する。III層との境付近には鉄分が酸化したような赤褐色土が斑状に見られる。土層柱状図2作成地点付近では、この層の下位に黒色や黒褐色のシルト質土などを挟む数層の砂層が堆積する。
- V層 黄褐色土 (10 YR 5/8) 粘性のあるシルト質土である。
- VI層 におい黄褐色～褐色土 (10 YR 4/3～4/4) 砂層。粒子の粗い砂層である。L面の調査区北東部に堆積し、この層の下位は礫層である。

4. 周辺の遺跡

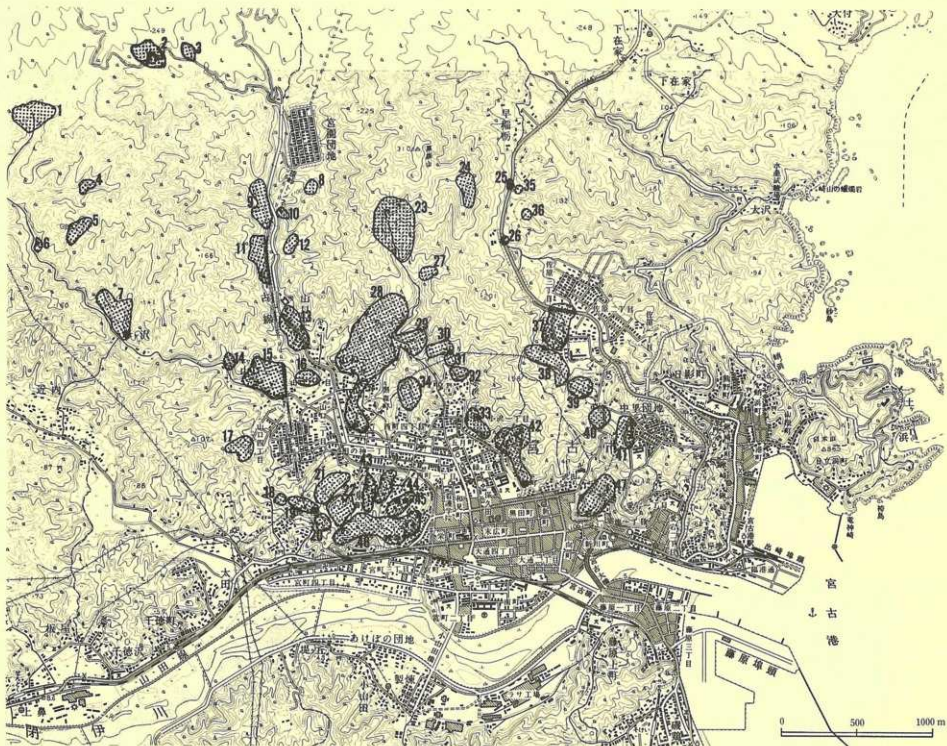
宮古市では400か所を越す遺跡が確認されており、その概要は市教育委員会の精力的調査によって遺跡分布調査報告書1～4にまとめられている。また、昭和60年度版宮古市遺跡分布図にそれまでに確認された遺跡の場所が一覧表とともに網羅されている。

本稿では赤畑遺跡のある山口川流域とその周辺に限って概観する。第6図には47か所の遺跡を図示している。その時代別の内訳は縄文時代33、古代14、城館3、その他・不明13遺跡である。複合遺跡はそれぞれ1か所に数えている。

立地上の特徴としては、小河川流域の狭い低地やその背後の丘陵および山麓地緩斜面上に遺跡が多い。山口地区では山口川流域の低地やそれに続く丘陵・山地の緩斜面上に立地する。小沢・日の出町・早稲橋の各地区では黒森山から延びる山麓地および丘陵の緩斜面上に、泉町・鶴崎地区では近内の小起伏山地から東に張り出す丘陵端部に立地する。

縄文時代の遺跡では中期や後期の遺物が見つかる例が多い。山口川流域でも赤畑遺跡をはじめ周辺の高根や駒込I遺跡でも中・後期の遺物が見つかる。高根遺跡では発掘調査が行われ、大木8b式期を中心とした多くの土器とピット群や墓塚群等が検出されている。

古代の遺跡は低地のすぐ背後の丘陵地に立地するものが多い。泉町狐崎II遺跡ではそれ程広くない尾根上に竪穴住居跡が検出されている。宮古市ではこのような尾根上に古代の集落跡が



周辺の遺跡一覧表

遺跡名称	遺物・遺構	所在地
1 黒石	縄文時代中・後期土器・漆器	近内第5地割跡・沢
2 瓦子塚1	縄文時代中期土器・山茶	山口第15地割瓦子塚
3 瓦子塚2		
4 移・沢IV		近内第5地割跡・沢
5 移・沢III		
6 移・沢II		
7 移・沢I	縄文時代前期・後期・鉄器・土器	
8 小平田	縄文時代土器	山口第12地割小平
9 平沢	縄文時代中期・後期土器	山口第13地割平沢
10 小平目	縄文時代土器	山口第12地割小平
11 高瀬	縄文時代中期土器	山口第11地割高瀬
12 小平1	縄文時代中期土器	山口第12地割小平
13 赤瀬	縄文時代中期土器	山口第11地割赤瀬
14 山口第15日 鉄伴		山口第9地割跡込
15 山口第15日 I	縄文時代前期・後期土器・漆器・遺物	※
16 天神山	縄文時代土器・土器・漆器	山口第7地割天神山
17 延所	縄文時代土器	山口第8地割延所
18 長瀬IV		千原地割跡込・山口第8地割跡込
19 長瀬V		
20 長瀬寺目	縄文土器・土器	千原第2地割跡込
21 泉町區跡目	奈良・平安時代土器・鉄器	山口第6地割跡込・泉町
22 泉町區跡目		※
23 黒森山	古瀬森神社等	山口第4地割跡の神前
24 黒森		※
25 南沢I	縄跡・陶器	山口第5地割南沢
26 栗原	縄文時代アラスカ状ビッド	陶器・山口第1地割栗原
27 黒森マヤ沢	縄文時代早期土器	山口第4地割跡の神前
28 山口池	城跡遺跡	山口第5地割跡込・第1地割跡込
29 伊勢野	縄文時代後期土器	山口第地割跡/神前, 跡跡中心部
30 小沢V 神石	縄文時代後期土器・土器	小沢二丁目
31 小沢IV 人形森	縄文時代後期土器・土器・漆器	
32 小沢III 倉平	縄文時代中期・後期土器	※
33 小沢II 塚	縄文時代早期・貝類	
34 伊勢野・沢	縄文時代土器・鉄器・土器・漆器	西町四丁目
35 早瀬跡V	陶器・陶器	山口第4地割早瀬跡
36 早瀬跡VI	陶器	山口第8地割早瀬跡
37 日の出町I	縄文時代前期土器	日の出町
38 日の出町II	縄文時代中期土器・フィロロ	※
39 日の出町III	縄文時代土器	※
40 沢田I	土器	沢田
41 沢田II		※
42 小沢日大上	縄文時代土器	小沢一丁目
43 泉町區跡目I	土器	山口第6地割跡込・泉町
44 鴨崎I	土器	鴨崎町
45 鴨崎II	土器器・漆器跡	
46 宮間池	城跡遺跡	千原第1地割跡込・沢・泉町
47 黒田池	城跡遺跡	本町・沢田

第6図 周辺の遺跡位置図

検出される例が稀ではない。黒森山の黒森神社からは調査によるものではないが、かつて勾玉が見つまっているという。

城館跡は3か所図示している。28の山口館は小笠原氏、46の笠間館と47の黒田館は河北閑伊氏の館跡（1986年岩手県中世城館分布報告書）とされている。

注）1988年宮古市教育委員会による発掘調査が行われており、発掘担当者の鎌田祐二氏から御教示をいただいた。

〈引用・参考文献〉

- 岩手県企画開発室 1973年 『土地分類基本調査』 宮古、鮎ヶ崎
岩手県教育委員会 1986年 『岩手県中世城館跡分布調査報告書』 岩手県文化財調査報告書第82集
貝塚真平他 1985年 『日本の平野と海岸』 岩波書店
宮古市教育委員会 1985年 『宮古市遺跡分布図』昭和60年度版 宮古市埋蔵文化財調査報告書9
宮古市教育委員会 1983～86年 『宮古市遺跡分布調査報告書1～4』 宮古市埋蔵文化財調査報告書3・4・6・8
百川虎雄他 1973年 新編『日本地形論』 東大出版会

III 調査の方法

1. 野外調査

(1) 調査区の設定

調査範囲は道路建設予定地に沿って南北に細長く広がり、その幅は11～20m、長さ150m余りである。調査は昭和62・63年度にわたって行なわれた。測量座標の軸線は任意の2点を設定し、それぞれ基準点1・2とし、その2点を結ぶ直線とした。軸線は針北に対して約15度西偏する。基準点1を座標基点とし、40×40mの大区画を設定し、さらに大区画毎に4×4mの小区画を設定した。区画の名称は大区画が南から北へI～V、西から東へA・Bとし、小区画が南から北へ0～9、西から東へa～jを与え、それらを組み合わせて呼称した。例えば大区画名はIA区・III B区、小区画名はII A 9 j区・IV B 0 a区等（第4図）とした。

基準点1・2の平面直角座標第X系による成果値、および杭高(L)は以下のとおりである。

基準点1 $X = -38219.364 \text{ m}$ $Y = 94678.841 \text{ m}$ $L = 26.210 \text{ m}$

基準点2 $X = -38182.153 \text{ m}$ $Y = 94664.044 \text{ m}$ $L = 26.324 \text{ m}$

(2) 粗掘り・遺構検出

トレンチ掘り等によって層位や遺物の分布状況を確認した後、粗掘りは重機と人力によるものと併用した。62年度の調査では遺構が検出されなかったが、63年度の調査でいくつかの遺

構が検出されている。検出した遺構には種類別に番号を与え、1号住居址・1号ピットなどのように呼称した。溝跡は1条なので番号を与えていない。

(3) 遺構の精査・出土遺物の取り上げ

住居址は4分法、ピットは2分法を原則とし、溝跡は土層観察用のベルトを適宜残して掘り進めた。精査の各段階で、図面の作成・写真撮影等必要な記録をとった。遺構内からの出土遺物は鉄器類3点と極く少量の土器片のみで、出土地点を確認し取り上げた。遺構外出土遺物は層位を確認し、小区画または大区画単位で取り上げた。

(4) 実測と写真

遺構の平面実測は調査区画に合わせた1mメッシュを基本とする簡易造り方測量で行った。ライン名は基準点1を座標原点とし、北方向をN1…、南をS1…、東をE1…、西をW1…とした。断面図は任意の高さで水平水糸を張り、作成した。縮尺率はいずれも20分の1である。図面は作業員の協力を得て作成した。写真撮影は6×7cm判モノクロ1台、35mm判のモノクロとカラースライド各1台を使用した。

2. 室内整理と報告書の作成

室内整理作業は遺構実測図の点検・合成・トレース、遺物の仕分け・登録・実測・拓影・トレース・写真撮影・図版作成等を臨時職員の協力のもとに行った。

(1) 遺構関係

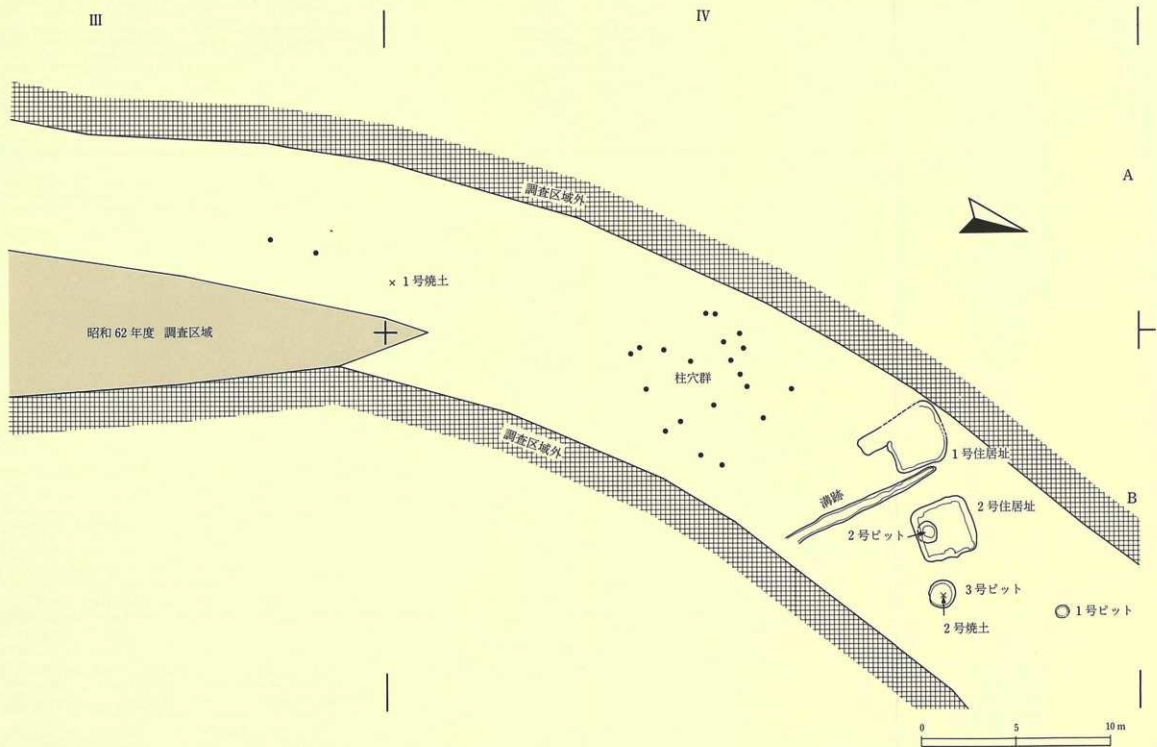
遺構図版は現地で作成した実測図をもとにトレースし、掲載した。図版の縮尺は遺構配置図が1/200、住居址・溝跡・柱穴群は1/40、ピット・焼土が1/30である。写真図版の縮尺は不定である。基本層位の層位はローマ数字、遺構埋土の土層名はアラビア数字で表わしている。

図版中に使用したスクリーン・トーンおよびその他の表示は次のとおりである。



(2) 遺物関係

出土遺物の整理については野外調査時に水洗・注記を行い、室内整理で種類別の仕分け・接合・復元を行った。出土した土器はすべて破片で、代表的なものを選択して掲載している。石器類や鉄器類は出土量が少なく、そのすべてを掲載している。各遺物図版の縮尺は土器類・礫石器が1/3で、他は1/2である。図版中にもその旨示している。写真図版の縮尺はおおよそ、土器類が1/2・剝片石器2/3・礫石器1/3・石製品4/9・鉄器類1/1である。



第7図 遺構配置図

IV 検出された遺構と遺物

1. 遺構と遺構内出土遺物

調査の結果、検出された遺構は竪穴住居址2棟、ピット3基、焼土2基、溝跡1条、それに柱穴群である。遺構内出土遺物は2号住居址からの鉄鏝1点と器種不明の鉄製品1点、それに1号ピットからの角釘1点である。

1号住居址 (第8図、PL-2)

調査区の北東IV B区の平坦面に構築されている。検出面は基本層序II b層土中であるが、本末はII層上面から掘り込まれたと思われる。平面形はやや歪んだ方形で、南東部に長方形の張り出しを持つ。規模は1辺が3m余り、張り出し部のそれは約1×1.5mである。

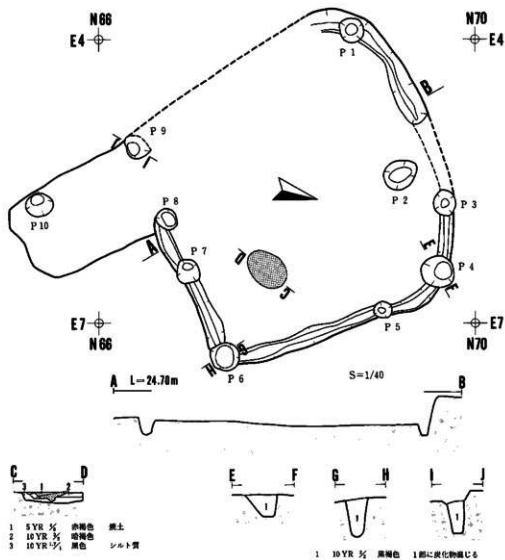
埋土は黒褐色のシルト質土である。床面は砂質土であるが、部分的に黒褐色シルト質土の所もあり、堅く締っている。南西壁際の状況については掘り過ぎの為不詳であるが、壁溝は張り出し部と北西壁際の一部を除き、ほぼ全周する。柱穴状小ピットは10個検出されている。四隅にあるP₁・P₄・P₆・P₉はP₄を除き深さ30cm以上である。柱穴の埋土は黒褐色シルト質土である。炉は南東壁際から約60cm内側にあり、焼土は46×32cmの範囲に楕円形状に広がる。焼土の量大層厚は8cmである。

2号住居址

遺構 (第9図、PL-2・3)

1号住居址の北東2mに並列して位置する。検出面も同様である。平面形は方形で、規模は1辺が3m余りである。

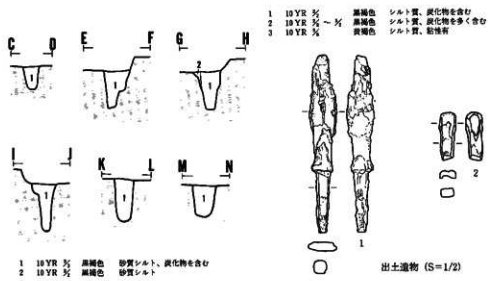
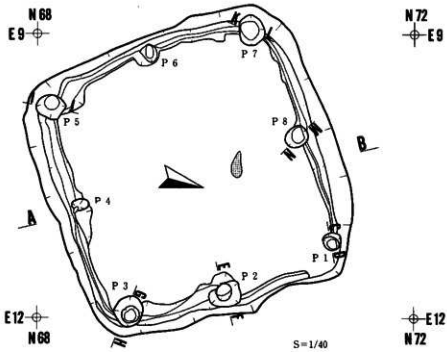
埋土は2層に分かれる。両層とも黒褐色シルト質土で、下部層には炭化物が多く含まれる。壁は直立または若干外傾する。砂層を掘り込んでいるので脆く、崩れやすい。壁高は検出できた範囲では20cm前後である。壁際には溝が巡り、ほぼ全周する。溝の幅は10~20cm、深さ15~20cmで、底面は波打つような凹凸が若干見られる。床面には粘性のある黄褐色シルト質土がほぼ全面に貼られている。非常によく締っており、凹凸が少なく、概ね平坦である。床面中央からやや北西壁に寄った所に弱い焼成痕が認められ、付近には炭化物が比較的多く散在する。これらの炭化物は樹種鑑定でくりという同定結果を得ている。柱穴は四隅と各辺のほぼ中央に、計8個検出されている。柱穴の埋土は、基本的には住居址埋土と同様の黒褐色シルト質土で、掘り方には褐色土等が若干ブロック状に混じる。柱痕跡部分の埋土はほぼ均質である。P₁・P₇・P₈には径10数cmの柱痕跡が認められる。



第8図 1号住居址

遺物 (第9図、PL-7)

床面中央からやや北西壁に寄った床面直上から鉄鏝1点と周溝埋土中から器種不明の鉄製品1点が出土している。鉄鏝は全長約9.4cm、鏝身の長さ6.1cm・最大幅1.5cm・最大厚0.5cmである。全面錆化が進んでおり、錆部分を含む値である。器種不明の鉄製品は端部が扁平でやや幅広になっており、横断面の方向の両端が湾曲する。大きさは残存値で長さ25mm・最大幅9mm・最大厚4mmである。



第9図 2号住居址

1号ピット

遺構 (第10図、PL-4)

2号住居址の北約6mに位置する。検出面はVI層上面であるが、この付近はII層土を欠き、III・IV層土の堆積も部分的である。平面形は円形で、断面形は浅皿状を呈する。規模は開口部径約65cm、底部径約55cm、深さ約20cmである。埋土は黒色のシルト質土の単層で、径20~40cm程の大礫が4個入っている。

遺物 (第10図、PL-7)

角釘が1本出土している。先端部がわずかに欠損し、現存する長さは65mmである。

2号ピット (第10図、PL-4)

2号住居址の下位から検出されている。検出面はIV層上面である。平面形は開口部がやや不整の楕円形状、底部が不整の円形状を呈する。底面には若干凹凸がある。西側の壁は中・下部では若干内傾し、開口部付近で外傾する。東側の壁はゆるく外傾する。断面形はバケツ形に近い。規模は開口部径が約120×100cm、底部径約72cm、深さ約53cmである。埋土は7層に分けられ、上部にはシルト質の黒色土や黒褐色土、下部壁際には粗砂や小礫混じりの黒褐色土などが堆積する。

出土遺物はない。

3号ピット (第10図、PL-4)

2号住居址の北東壁から約1m東に位置する。検出面はIV層上面である。平面形は開口部・底部とも楕円形を呈する。底面には若干凹凸があり、壁はゆるく外傾する。断面形は浅皿形状を呈する。埋土はIII層起源と思われる黒色土の単層で、最上部は焼成(2号焼土)を受けている。断面図3層は掘り過ぎ部分である。

出土遺物はない。

1号焼土 (第11図、PL-5)

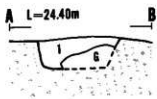
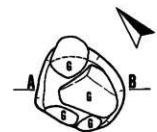
基準点2から西へ約2.5mの所に位置する。検出面はIII層土下部である。本遺構が検出された地形面はH面で、H面での遺構は他には柱穴状小ピット2個のみである。平面形は不整形で、規模は北西-南東方向で約35cm、北東-南西方向で約42cmである。層厚は約10cmである。周囲には本遺構に伴うと思われる他の遺構はなく、単独の遺構と思われる。

相伴遺物はない。

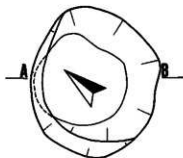
2号焼土 (第11図、PL-5)

3号ピットに重複し、3号ピット埋土最上部が焼成を受けて形成されたものである。焼土は南北約65cm、東西約85cmの範囲に、不整形に広がる。層厚は約13cmである。

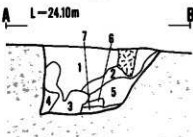
相伴遺物はない。



1 10 YR 5/ 黒色土 シルト質
1号ピット



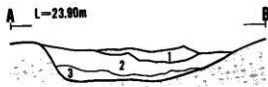
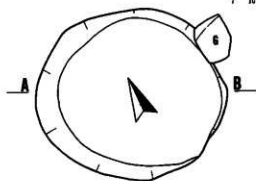
S=1/30



- 1 10 YR 5/ 黒色
- 2 10 YR 5/ ~ 5/ 黒褐色
- 3 10 YR 5/ 黒褐色
- 4 10 YR 5/ 黒褐色
- 5 10 YR 5/ 暗褐色
- 6 10 YR 5/ ~ 5/ にぶい黄褐色~褐色
- 7 10 YR 5/ 黄褐色

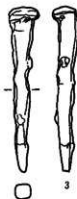
- シルト質
- シルト質
- シルト質、粗砂、小礫が混じる
- シルト質、砂礫が混じる
- シルト質
- 粗砂
- シルト質、砂礫混じる

2号ピット



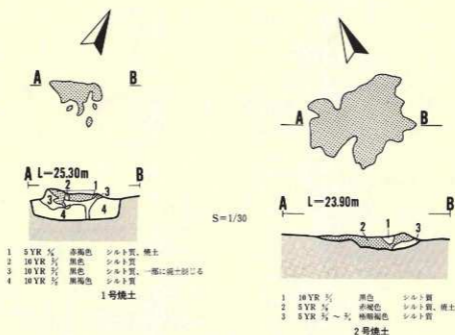
1 2号焼土
2 10 YR 5/ 黒色 シルト質
3 腐り腐敗
3号ピット

S=1/30



1号ピット出土遺物 (S=2/3)

第10図 ピット



第11図 焼土

溝跡 (第12図、PL-5)

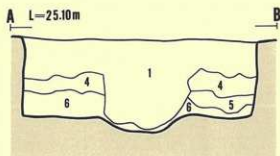
1号住居址と2号住居址の間に端を発し、調査区を横断するように南東方向に延び、調査区外へと続く。検出面は住居址と同様である。底面は砂層土中であり、比較的平坦である。検出された部分での規模は幅40~73cm、深さ15~40cm、長さ8.4mである。埋土は黒色のシルト質土が卓越する。

出土遺物はない。

柱穴群 (第13図、PL-6)

溝跡の南西側に20個程の柱穴状小ピットが検出されている。形状には円柱状のものと角柱状のものがある。規模は径が20数cm前後のものが多い。埋土は大半が黒褐色シルト質土の単層である。柱穴の配列状況からはP₂-P₃・P₁₇-P₁₈を梁行、P₂-P₁₅-P₁₅・P₃-P₈-P₁₁-P₁₂-P₁₃-P₁₃を桁行とする建物跡の可能性が考えられる。所属する時代については不明である。

図版・写真図版を省略したが、III A区でも2個の柱穴状小ピットを検出している。1号焼土から5m程南に位置し、検出面はV層上面である。2個とも円柱状をなし、径は約20cm、深さ10数cmである。両者の間隔は約2.5mである。

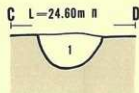
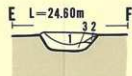


N66
E8

N63
E9

E9
N68

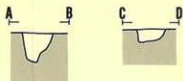
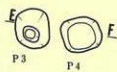
S=1/30



各断面共通

1	10 YR 5/2	黒褐色	シルト質、小礫混じり
2	10 YR 5/2	黒褐色	砂質
3	10 YR 5/2	黒褐色	砂質、小礫混じり
4	10 YR 5/2	黒色	シルト質、小礫混じり
5	10 YR 5/2	黒褐色	シルト質、砂礫が多く混じる
6	10 YR 5/2 ~ 5/1	黒褐色~にぶい黄褐色	砂質

第12図 溝跡

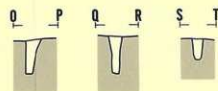
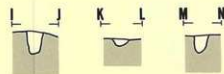
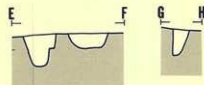


N54
WEO

N60
WEO



N60
WEO



E6
N54

E6
N60



S=1/40



第 13 图 柱穴群

2. 遺構外の出土遺物

土器片と石器、それに鉄滓が出土している。土器片は縄文時代中期のものが中心であるが、他に早期・後期・晩期のものがそれぞれ少量ずつ出土している。その他、弥生式土器2点、北海道系の後北式土器2点、土師器1点がある。土器はすべて破片で、復元できるものはなく、総量はコンテナ1箱分ほどである。石器は石鏃・磨石等計11点、鉄滓は住居址が検出された付近を中心に10点余り出土している。

(1)土器・土製品

(a)縄文土器

縄文土器は早期・中期・後期・晩期・時期不明の粗製土器に分類し、それぞれ順にⅠ～Ⅴ群とした。

Ⅰ群土器（第14図、PL-7 4～10）

4は口縁部破片で、捺糸文状の施文がなされている。波状口縁をなし、頂部は波頭の形状を呈している。胎土には繊維が若干含まれる。5～9は縦ないし横方向に幾何学的な細隆起線文が見られ、内外面に条痕文が施されている。10は内外面ともに条痕文がつけられている。胎土にはいずれも粗砂が含まれる。焼きが比較的かたく、薄手の土器である。

4は中葉、5～10は末葉の土器と思われる。

Ⅱ群土器（第14・15図、PL-7・8・9 11～49）

大木8b式期を中心に、9・10式期のものまでである。隆帯と沈線のいずれか、またはその組み合わせによる施文がされている。

11は口唇部直下に細い粘土紐を渦巻状に貼付けている。12も細い粘土紐を貼付け、粘土紐に沿って沈線で施文している。13は口縁部に大胆な渦巻状の隆帯を配し、その下端には沈線が横走り、体部と区画する。体部の地文は縦位のLR単節斜縄文で、さらに沈線による施文が見られる。14～16・18～20は隆帯とそれに沿った沈線による施文で、14・16・20は渦巻状の文様をなす。16は口唇部直下を横走る沈線に沿って刺突痕がつけられている。13・14は波状口縁をなし、13の頂部は一部剥落するが、2個1対の突起をなしていると思われる。17・21～31はいずれも体部破片で、RLまたはLRの斜縄文を施した後、沈線による文様を施文したものである。21もこれらの破片と同類と思われるが、口縁部破片で、口唇部直下に横走していた隆帯の剥落痕がある。31までの土器は曲線を主とした文様であるが、32～39は残片部分を見る限りは直線的な文様をモチーフとしている。32は隆帯、33・34は沈線による文様である。35～37は口縁部破片で、口縁に平行な隆帯が1～2条横走る。残存部には縄文が見られず無文である。35・36の胎土には粗砂が比較的多く含まれる。37の内外面は磨かれ、焼きも比較的固い。38・39は体

部破片で、38は沈線、39は平行に横走する隆帯と沈線で施文される。40も体部破片で、貼付けによる隆帯と隆帯に沿った沈線で施文されている。比較的焼きが固く、内面は磨かれている。41・44・46・49は沈線で区画し、磨消と縄文で文様を構成している。41・46・49の内面は磨かれている。44の胎土には粗砂が多い。42・43・45は沈線と隆帯によって施文される。42・45の地文は捺糸文状の施文である。47・48は口縁部破片で、47は口唇部直下に刺突痕がめぐり、その下位に沈線が施される。沈線の上位は無文で、下位には磨滅しているが、縄文が施されていたと思われる。胎土には粗砂が多く、もろい。48はじ状の沈線をモチーフとした文様が施文されている。

III群土器 (第15図、PL-9 50~54)

50・53・54は口縁部、51・52は体部破片である。50~53は何条かの沈線が横走する。50~52の地文は撚りの細かい単節斜縄文が施され、50・51は沈線と沈線の間に磨消された文様帯を持つ。50の口唇部には残存部に2個の小突起がついている。53は沈線の他は無文である。54は3条の平行する沈線が横走し、その下位にも沈線で区画された文様を持つ。胎土には粗砂が多い。

IV群土器 (第15図、PL-9 55~58)

55は口縁部破片で、沈線と磨消によって雲形文が刻まれている。口縁部最上部は肥厚し、口唇部には約2.5cmの等間隔に小突起がつき、その間を沈線でつないでいる。56も口縁部破片で、口縁部最上部が肥厚し、口唇部には連続する刻みがつく。口唇部直下に2条の平行沈線が横走し、口唇部の内側にも沈線がめぐって段差がつけられている。57は体部破片で、比較的焼きがよく、裏面は磨かれている。表面は一部磨滅して明確でないが、一部に沈線と磨消による文様が見られる。58は小型鉢の体部破片で、肩部付近のものと思われる。平行沈線が横走し、その下位にはRL単節斜縄文が施されている。

V群土器 (第15・16図、PL-9・10 59~85)

ここでは所属時期の明確でない縄文のみの粗製土器を一括した。59・60は口縁部破片で、59は波状口縁をなし、60は口縁部最上部が若干肥厚する。地文はどちらも撚りの細かいRL単節斜縄文である。61~64・67~69は体部破片で、61はRLRの複節斜縄文、63はLR単節の異条斜縄文、64はRL単節、67~69は縦位の捺糸文で施文される。62はLR単節斜縄文を回転の方向を変えて羽状縄文状に施文している。65・66は口縁部破片で、65は口縁部最上部が若干肥厚し、66は折り返し口縁である。地文はRL(65)、LR(66)の単節斜縄文である。70は口縁部破片で、附加条による施文がなされている。71~81は体部破片で、施文には異節斜縄文(72)、附加条(71・73)、無節斜縄文(79・80)、単節斜縄文(74・76)、縦位の結束第1種の羽状縄文(77・78)がある。

82~85は底部破片で、82・83は網代痕、84・85は木葉痕のつくものである。

(b)弥生式土器 (第16図、PL-11 86・87)

弥生式土器は86・87の2点のみ出土している。どちらも口縁部破片で、IV B区II層の砂層からの出土で、流れ込みによるものであろう。86は小突起を持つ波状口縁である。文様は平行沈線を主体とした工字文で、小突起の下位に刺突痕がつく。弥生時代初期のものであろう。87は口唇部から1cm程下位を沈線が横走り、沈線に向かって下から突き上げるような刺突痕が1cm弱位の間隔でつけられている。弥生時代後葉のものと思われる。

(c)後北式土器 (第16図、PL-11 88・89)

88・89の2点のみ出土している。どちらもIV B区のII層(砂層)出土で、87の弥生式土器と同様流れ込みによるものと思われる。88・89とも体部破片で、三角形の列点文と縞縄文が施されている。後北C₂式期のものと思われる。

(d)土師器 (図版・写真図版 省略)

1点のみの出土であるが、ロクロ不使用の坏の体部片がII B0・1・2bのIII層から出土している。内面は黒色処理され、調整はヘラミガキである。外面は磨滅して調整痕の有無は不明である。

(e)土製品 (第16図、PL-11 90~93)

いづれも円盤状土製品である。90・91・93は粗製土器の体部破片を、92は小型鉢の底部を用いている。90・92は一部を欠くが円形状を、91・93は隅丸形状を呈する。整形は93は打ち欠いただけであるが、90・91は周縁を研磨している。92はヘラ状のもので削ったような痕跡が見られる。直径は39mmから53mmの間である。

(2)石器・石製品

(a)剝片石器 (第16図、PL-11 94~97)

94・95は石鏃で、どちらも有茎式である。94は両面加工され、先端部と茎部の一部を僅かに欠損する。95は完形品で、表裏両面の一部に一次剝離痕を残す。96は尖頭器に分類した。形状は二等辺三角形で、無茎の凹基式石鏃によく見られるタイプであるが、長さ49mm・幅約32mm・重さ14.2gと大きい。両面加工で、先端部を僅かに欠く。97は縦形の石匙で表面と裏面の一部に二次加工を施している。

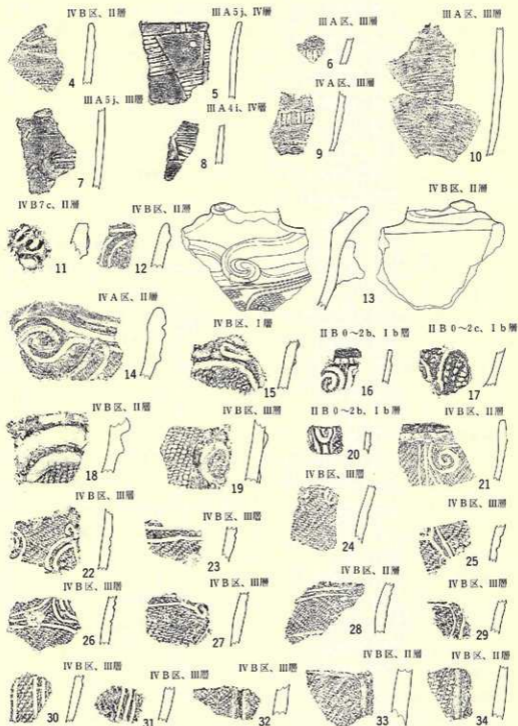
(b)礫石器 (第17図、PL-11 98~104)

98~104の礫石器はすべて磨石である。98・103を除き、全面またはほぼ全面にわたって磨かれている。104は研磨されたように表面がなめらかである。98は扁平な楕円形状の礫で、その縁辺に磨面が見られる。103は厚みのある楕円形状の礫で、やはり縁辺に磨面がある。99・100・102にも表・裏面だけでなく、98など同様に縁辺にも磨面が見られる。

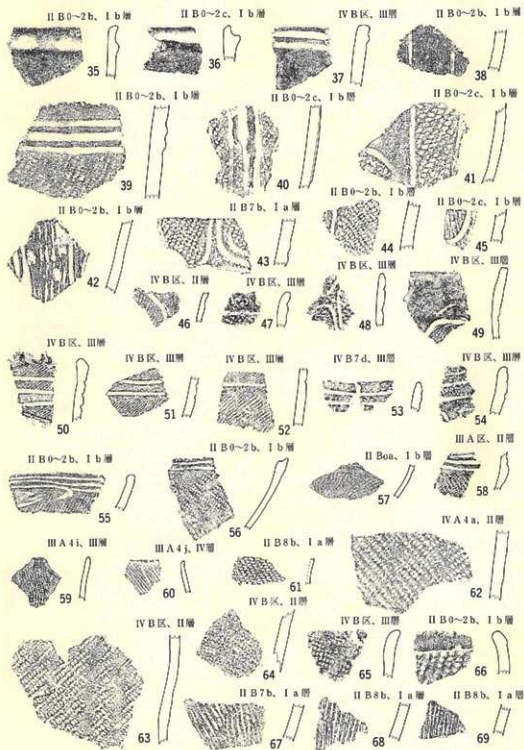
(c)石製品 (第16図、PL-11 105)

105は円盤状石製品と思われる。約3分の1を欠損する。自然石の可能性も否定しきれない

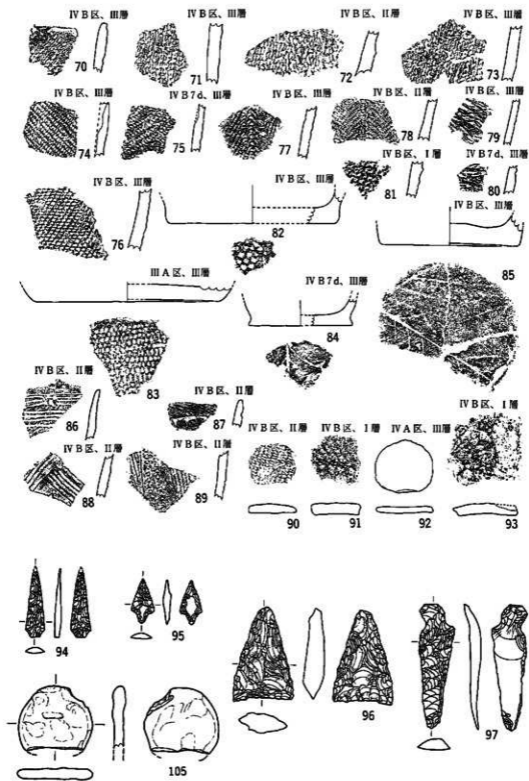
が、軟質の石材が用いられており、残存部の縁辺は円形状に整形されているように思われる。



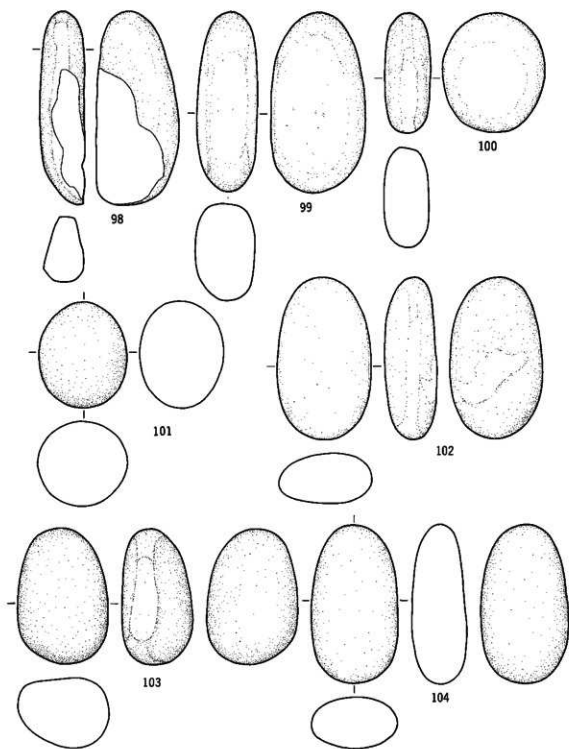
第14図 遺構外の出土遺物 土器(1)



第15図 遺構外の出土遺物 土器(2)



第16図 遺構外の出土遺物 土器(3)・石器(1)・石製品



第 17 図 遺構外の出土遺物 石器(2)

石器一覧表

図版番号	出土地点	層位	器種	最大長mm	最大幅mm	最大厚mm	重量g	石質	産地	備考
第16図 94	IV B4a	II層	石 鏃	33.7	10.0	3.6	0.9	珉質泥岩	奥羽山地 新第三系	
# 95	IV B5a	II層	#	22.6	11.3	6.2	0.7	チャート質粘板岩	北上山地 古生界	
# 96	III A2	III層	尖頭鏃	49.0	31.7	10.9	14.2	凝灰質珉質泥岩	奥羽山地 新第三系	87年調査
# 97	III A 区	III層	石 鏃	64.2	19.1	6.6	7.1	#	#	#
第17図 98	II B9b	I層	磨石	152	38	57	500	凝灰質硬砂岩	北上山地 古生界	87年調査
# 99	III A6	I層	#	142	75	49	740	#	#	#
# 100	II B7a	III層	#	94	80	36	480	閃緑岩	#	中生界 #
# 101	IV B 区	III層	#	81.9	69.1	65.2	500	半花崗岩	#	#
# 102	III A 区	III層	#	126.7	72.3	39.6	610	緑色凝灰岩	#	古生界
# 103	IV B 区	III層	#	167.2	72.3	36.1	620	閃緑岩	#	中生界
# 104	IV B 区	III層	#	124.8	67.6	42.2	530	半花崗岩	#	#
第18図 105	IV B 区	I層	円盤状石製品	(34.6)	38.8	6.8	12.7	凝灰質硬砂岩	#	古生界

V まとめ

1. 遺構

検出された遺構は中世の時期のものと考えられる竪穴住居が2棟、他にピット3基などである。宮古地方では中世以降の遺構の調査例は少なく、ここでは主にこの住居について述べ、遺構のまとめとした。

竪穴住居の平面形は方形を呈し、うち1棟には張り出しを持つ。炉の形態は、1棟が地床炉、他の1棟は弱い焼成痕が認められるが、炉は検出されていない。床面はどちらも平坦で締りがよく、壁際には溝が巡る。検出面は2棟ともII層である。遺物は1棟から鉄鍔1点と器種不明鉄製品が出土している。鉄鍔の原料は含リン磁鉄鉱で、住居外の周辺から出土した鉄鍔は精錬滓という分析結果を得ている。鉄鍔の形状は身が柳葉ないし楕葉形をなし、時期は特定できない。上限が平安時代と考えられる。

類似の住居は二戸市長瀬C遺跡、花巻市古館II遺跡などで検出されており、出土遺物等から所屬時期は中世と考えられている。当遺跡の住居も、平面形、張り出しの有無、炉の形態等の点で共通性があり、所屬時期は中世と思われる。

同一面を検出した柱穴群は配列状況から掘立柱建物跡の可能性も考えられる。想定される梁行・桁行の方向と竪穴住居の壁の方向はほぼ同一である。柱穴群の時期を推定する資料は検出面のみで他にないが、同様の時期だとすれば、住み分けとか機能の違いとかが考えられる。

遺構は山口川によって形成された谷底平野の平坦面にあり、同様の地形面は調査区外の北西側と南東側にも続く。類似の遺構がそれら調査区外にも存在する可能性はあると思われる。宮古地方では縄文時代や奈良・平安時代の集落の立地等については、資料の蓄積が進み、傾向が捉えられるが、中世の集落等については資料に乏しく、今後の調査例の増加を待つ部分が多いと思われる。

2. 遺物

出土した縄文土器の多くは中期のもので、早期・後期・晩期のもは極く少量である。

早期の土器(第14図)は、捺糸文状の施文がなされるもの(4)、細隆起線による幾何学的な文様を構成するもの(5~9)、内外面に条痕文を有するもの(10)、とがある。5~9は売場遺跡VI群D₁類に類似し、ムシリI式に相当すると思われる。10もほぼ同様の時期と考えられる。これらの出土層位はIII・IV層である。4は胎土・文様から5~10とは系統を異にするもので、II層から出土している。II層は砂層で、山口川に注ぐ小規模な埋積谷に堆積しており、この層は河川の営力によって形成されたものと思われる。

中期の土器は大木8b式期のものが主体で、大半はII層からの出土である。山口川流域は中期の遺跡が多く、近接する高根遺跡でも大木8b式期の土器を多く出土している。

後・晩期の土器は磨消縄文や口唇部に小突起を持つもの及び雲形文等で、後期は後葉、晩期は中葉の大洞C₂式期頃のものと思われる。出土層位は後期の土器がIII層、晩期の土器はI・II層である。

II層とIII層からの出土遺物に時期が逆転しているものがある。これはII層からの遺物が流れ込みによるためと考えられる。今回の調査で、縄文時代の明確な遺構は検出されておらず、該期の遺構は斜面上方の調査区外西側ないし北側に存在する可能性が考えられる。

僅か1・2点の破片の出土であるが、遺物で注目されるのは弥生式土器と共に後北式土器が出土していることである。弥生式土器2点のうち1点(第16図87)は口縁部直下に横走する沈線に沿って刺突痕がつく文様で、交互刺突文系列の土器と思われる。時期は、弥生式土器編年試論(1987年、小田野)でのV期と考えられる。後北式土器(第16図88・89)は縄文に三角形の列点文を持つもので、後北C₂式期のものであろう。88・89は同一個体の破片と思われる。87~89の3点はいずれもII層土からの出土で、流れ込みと考えられるので、共存関係を証明するものではないが、それを示唆する1つの資料になるとと思われる。V期の弥生式土器と後北C₂式との共存関係は弥生式土器編年試論でも指摘されており、それと矛盾するものではない。

写 真 图 版



近景 (南西から)



近景 (北東から)

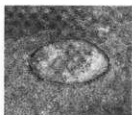
PL-1 遺跡近景



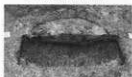
1号·2号住居址全景



1号住居址全景

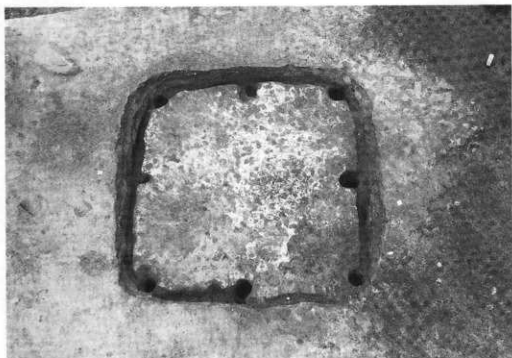


1号住居址炉平面

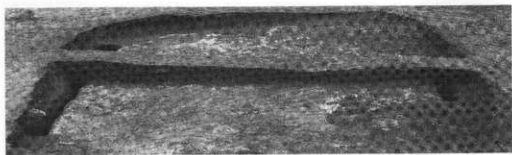


1号住居址炉断面

PL-2 1号·2号住居址



全景



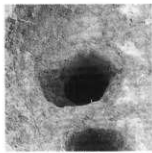
埋土断面



鉄鏝出土状況



柱穴断面



柱穴断面

PL-3 2号住居址



(平面)

1号ビット



(断面)

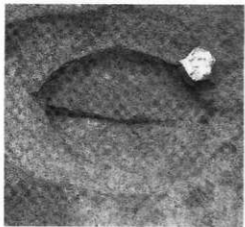


(平面)

2号ビット



(断面)



(平面)

3号ビット

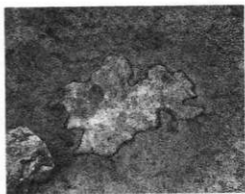


(断面)

PL-4 ビット



(平面)



(平面)



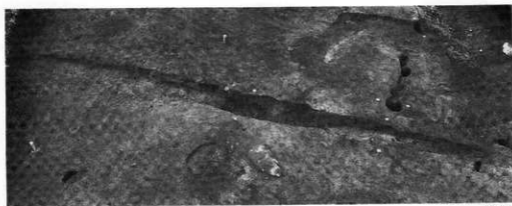
1号烧土

(断面)



2号烧土

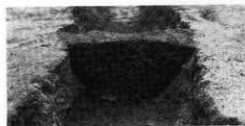
(断面)



(全景)

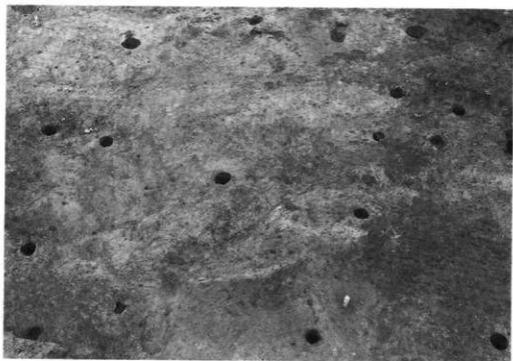


(断面)

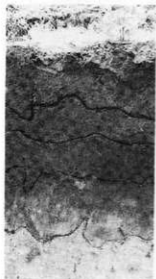


(断面)

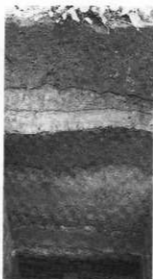
溝跡
PL-5 烧土・溝跡



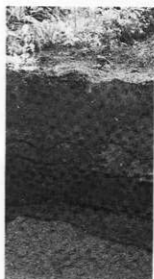
柱穴群



基本層序 (グリッドⅢ A7h)

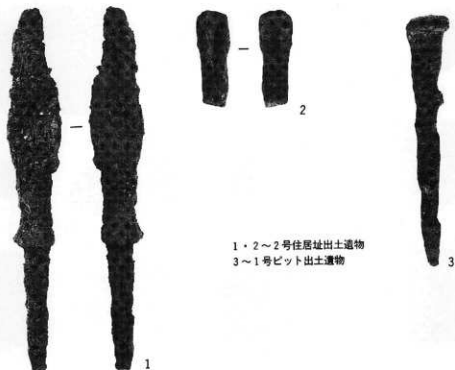


基本層序 (グリッドⅣ A5j)

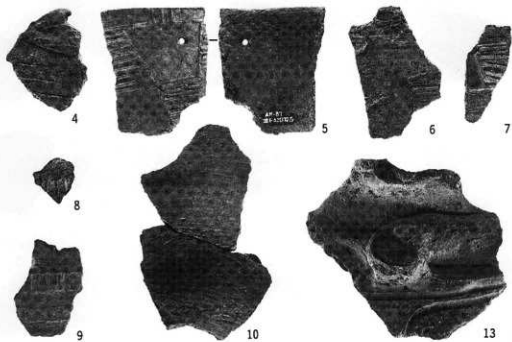


基本層序 (グリッドⅣ B7e)

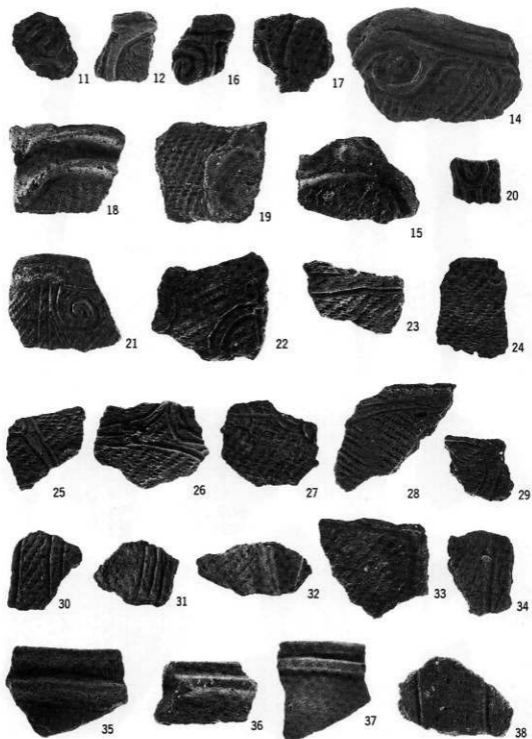
PL-6 柱穴群・基本層序



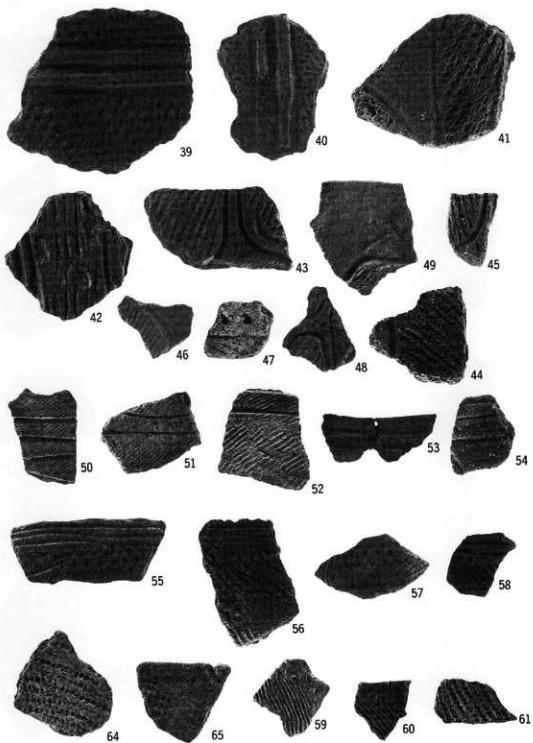
1・2～2号住居址出土遺物
3～1号ピット出土遺物



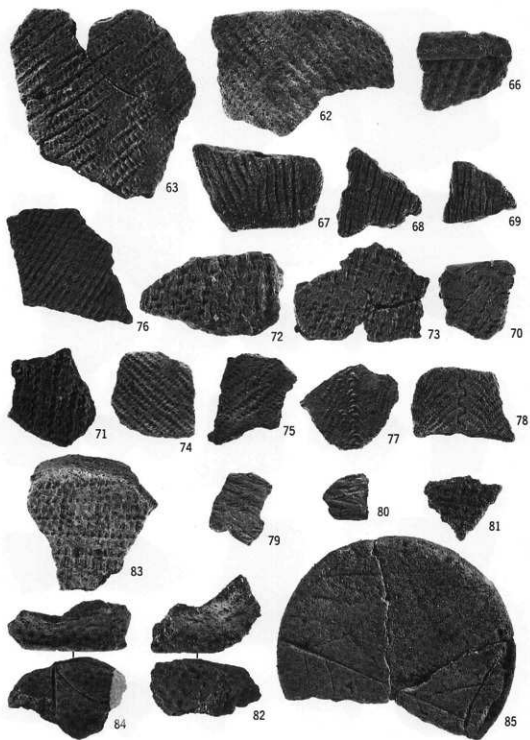
PL-7 遺構内の出土遺物
遺構外の出土遺物 土器(1)



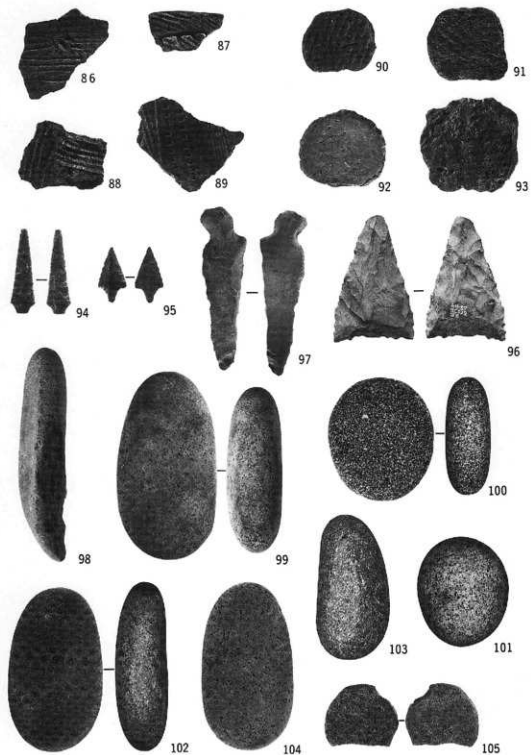
PL-8 遺構外の出土遺物 土器(2)



PL-9 遺構外の出土遺物 土器(3)



PL-10 遺構外の出土遺物 土器(4)



PL-11 遺構外の出土遺物 土器(5)・土製品
 石器・石製品

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

所 長	及 川 昌 二		
副 所 長	鎌 田 良 悦		
〔管 理 課〕			
管理課長(兼)	鎌 田 良 悦	痲 託 士 員	吉 田 一 男
課 長 補 佐	伊 藤 吉 郎	運 転 技 能	佐 藤 春 男
主 事	阿 部 隆 広		
〔調 査 課〕			
調 査 課 長	昆 野 靖		
課 長 補 佐	佐々木 嘉直		
主 任 文 化 財 員	小 田 野 哲 憲	文 化 調 査 財 員	遠 藤 修
〃	三 浦 謙 一	〃	斎 藤 邦 雄
〃	工 藤 利 幸	〃	高 橋 義 介
〃	高 橋 与 右 衛 門	〃	佐々木 信 一
〃	平 井 進	〃	小 原 眞 一
〃	中 村 良 一	〃	村 上 修 孝
〃	中 川 重 紀	〃	酒 井 宗 哉
文 化 調 査 財 員	藤 村 敏 男	期 限 調 査 付 員	相 原 伸 裕
〃	斎 藤 實 行	〃	及 川 靖 世
〃	光 井 文 隆	〃	女 鹿 文 雄
〃	佐 瀬 博 司	〃	濱 田 宏 涉
〃	斎 藤 隆 幹	〃	及 川 雅 之
〃	東 海 林 弘 均	〃	星 下 宏 堅
〃	佐々木 貞 行	〃	森 高 橋
〔資 料 課〕			
資 料 課 長	高 橋 薫 夫		
主 任 文 化 財 員	田 鎖 寿 夫		

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第142集

赤畑遺跡発掘調査報告書

県道宮古・岩泉線道路改良工事関連遺跡発掘調査

印刷 平成元年 7 月 25 日

発行 平成元年 7 月 30 日

発行 財団法人 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020 岩手県紫波郡南村大字下飯岡11-185

電話 (0196) 38-9001・9002

印刷 山口北州印刷株式会社

〒020-01 盛岡市青山四丁目 10-5

電話 (0196) 41-0585
